

ユージェニック・ヘミングウェイ

中村, 嘉雄

<https://hdl.handle.net/2324/4784716>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 中村 嘉雄

論文名 : ユージェニック・ヘミングウェイ

区 分 : 乙

論文内容の要旨

本論文の主な目的、学術的意義は概して次の二点にある。

一つは、アメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイの一九二〇年代から三〇年代の作品と語りの戦略を、同時代の文化、歴史、政治的な視点—優生学と流線型マシーン文化を中心に—から再検証し、自分の経験から作品を書く、伝記的作家という作家ヘミングウェイの根強い評価を見直すことにある。それにより、今後のヘミングウェイ批評およびアメリカ文学・文化研究において、ヘミングウェイ作品のアメリカ社会文化への影響とその深度を、従来の伝記批評の枠組みを超えて、より厳密、正確に分析することが可能となる。

二つ目は、このヘミングウェイ作品の政治的再検証を通して—作品の時代選択の理由もここにある—、アメリカの優生学と三〇年代流線型マシーン文化との親和性—優生学的思想の、三〇年代流線型マシーン文化への吸収—に関する近年の研究成果を検証、確認するとともに、その成果を補完することにある。この補完作業によって、そもそもアメリカの優生学と流線型マシーン文化は別個の歴史的現象でなく、優生学自体、近代科学のマシーン文化とともに発展し、本来マシーンのことが確認される。この補完によって、現在のロボティクスやサイバースペースのアバターといった、現代テクノロジーの「身体」に潜む優生学的影響—残響—を再検証する視点の一つを提供できる。

上記を踏まえた各章の役割と要旨は次の通り。

「第一章 伝記から政治へ—ヘミングウェイ作品の政治性と優生学の問いへ向けて」では従来の伝記批評に則して、作家の文体の起源を実際の「闘牛」経験—一九二四年の「アマチュア闘牛」—に探るとともに、当時の作家の「闘牛」とその周辺作品に見られる帝国主義的精神性、政治性を分析する。しかし、この「闘牛」の興味、モチーフは単なる個人的趣味では済まされない。当時の他の作家、画家の多くも「闘牛」に魅了され、ヘミングウェイの「闘牛」やその他周辺作品によく見られる「血」を通した一体感もナチスの男性兵士の精神性に類似している。ヘミングウェイの創作自体が時代の政治的産物であり、そこに、作品が当時の読者とアメリカ社会文化に及ぼす政治的影響力を再検証する必要性が生じる。

「第二章 不毛な時代—『日はまた昇る』における優生学的アイロニー」は、長編『日はまた昇る』のユダヤ人ロバート・コーンの「身体」を含む多くの表象が、当時の優生学的思想・政治背景に準じていることを確認するとともに、その背景を多分に利用した、作家ヘミングウェイの人種差別のレッテルを回避する語りの戦略に焦点が当てられる。特に、コーンの「つぶれた鼻」は当時の優生学的ユダヤ人差別—「鼻」と美容整形外科手術の政治的背景—と深く絡む。ヘミングウェイはこの人種差別的「身体」スティグマを利用、同じ思想背景の読者を巻き込み、差別責任を分散させる形で語りの戦略を構築する。ヘミングウェイ文体の氷山理論はこの読者との共犯関係を築く、人種差別的、政治的無意識としても機能した可能性が高い。

「第三章 兵士と帝国の危機—アメリカの民族的滅亡から優生学的マシーン文化へ」では短編集『われらの時代に』および長編『武器よさらば』を中心に、ヘミングウェイ作品において優生学、兵士、マシーンの「身体」の三つの要素が絡みあう理由、その文化、歴史、政治的背景が検証される。『われらの時代に』の小作品の兵士は当時の「退化するアメリカ」の象徴であり、ヘミングウェイはその優生学的退化の恐怖を短編集の時代的テーマとしていること、短編「エリオット夫妻」ではそういう時代の優生学的なアイロニーが出産マシーンの「機能不良」としてマシーンのように描かれること、その出産マシーンの不具合が『武器よさらば』では兵士＝軍隊マシーン＝優生学的理想「身体」を「故障」させる優生学的脅威—娼家や娼婦の梅毒による民族退化の恐怖—を軸に描かれ、主人公たちの子供は軍隊的世界に潜む民族退化の未来に絶望することが確認される。

「第四章 流線型文化とマリアの『身体』—『誰がために鐘は鳴る』の優生学的『理想』のメカニック・ボディ」は、長編『誰がために鐘は鳴る』のマリアの「身体」及び橋梁爆破のイメージ群に潜む、三〇年代流線型時代のマシーンの政治的「身体」を検証する。このマシーンの理想「身体」は従来の優生学的理想「身体」が換骨奪胎されたものだが、その融合はすでに十九世紀後半以降の優生学とマシーン文化の歴史に予言、準備されている。いわば、優生学的理想「身体」はマシーンの理想「身体」なのだ。この十九世紀以降の進展の成果がマリアであり、雑誌『ヴォーグ』の流線型工業デザイナーが理想とする「身体」なのだ。さらに、作品の中心的モチーフの橋梁爆破も当時のマシーンの、政治的「身体」イメージ、当時の便秘解消イメージ—効率的排泄工場＝マシーンとしての消化器や朝食「バナナ」—から解釈可能であり、作品自体が三〇年代流線型の政治的「身体」のアレゴリーといえる。